

裏面は平坦に作られ、横方向の棧をはめるための溝が上下に1ヶ所ずつ掘り込まれています。楯の製作年代については不明ですが、楯が出土した井戸の年代が8世紀前半とされていることから、その時期にはすでに楯が存在していたといえます。

楯の文様

楯の表面には赤・白・黒色で逆S字形の渦巻文と鋸歯文が描かれています。文様は天然の顔料と墨で描かれています。この文様の意味については文献に書かれていませんが、おそらく魔除けの役目があったと思われます。渦巻文の配色パターンは2種類あり、赤と黒の配置が反転しているものもみられます。またよく観察すると文様の下書き線や刻書がみられます。

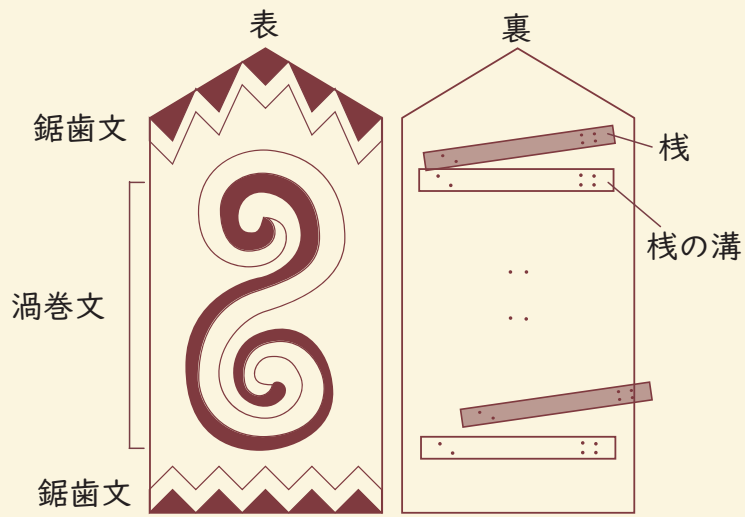
大住隼人舞

大住隼人舞は京田辺市大住にある月読神社と天津神社で、毎年10月14日の夕刻に奉納される舞です。昭和46(1971)年に大住地区の人たちが中心となって、鹿児島県祁答院(けどういん)町(現薩摩川内市)の日枝神社に伝わる隼人舞をモデルにして復元が行われました。また昭和47(1972)年に大住隼人舞保存会が結成されました。

大住隼人舞は昭和50(1975)年に田辺町(現京田辺市)の指定文化財第1号として指定され、令和7(2025)年で指定50周年を迎えました。現在、舞人は大住地域の中学生の男子が務めています。全6曲の舞を龍笛と太鼓による伴奏で演じています。

〈主要参考文献〉

- ・大住隼人舞保存会 2002『大住隼人舞の由来』
- ・集英社 2017『延喜式 下』
- ・竹森友子 2015「隼人の楯に関する基礎的考察」『黎明館調査研究報告』27
- ・坪井清足 1968「隼人楯」『日本民族と南方文化』
- ・奈良国立文化財研究所 1978『平城宮発掘調査報告IX-宮城門・大垣の調査-』奈良国立文化財研究所学報第34冊



隼人の楯の略図



大住隼人舞 盾伏の舞 (盾を持ち外からの悪霊を防ぐための舞)

京田辺市文化財指定制度 50 周年記念(大住隼人舞文化財指定 50 周年記念)

隼人の楯 特別展示

令和8(2026)年2月11日(水・祝)~15日(日)

隼人について

「隼人」は古代、九州南部の薩摩・大隅半島に住んでいた人々を指します。彼らの一部は当時の都であった奈良(平城宮)において、朝廷に奉仕したとされています。平安時代に編さんされた法典『延喜式』の第28巻 兵部省(隼人司条)に、隼人に関する記述がみられます。そこには隼人の職務として、元日や天皇即位の儀、外国からの訪問者がある際に、犬の遠吠を真似て発声し、風俗歌舞を披露するほか、大嘗祭に使用する竹細工を製作することなどが書かれています(『延喜式』隼人司条)。

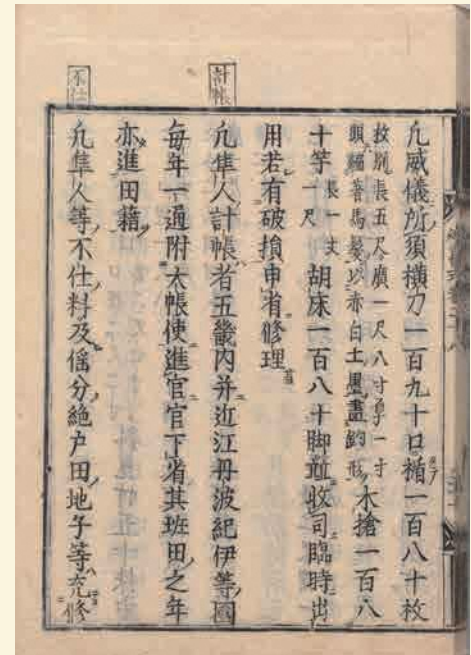
隼人たちが移住した場所として、『延喜式』の第28巻 兵部省(隼人司条)によると、隼人は五畿内(大和・山城・摂津・河内・和泉)と近江・丹波・紀伊に居住していたとされています。京田辺市の「大住」という地名は鹿児島県の「大隅」に由来するとされ、移住してきた隼人たちが住んだ拠点のひとつであったと考えられています。

隼人の楯の発見

昭和39(1964)年1月、平城宮跡の南西隅で井戸の遺構が検出されました。井戸は1辺約2.1mの方形の穴を掘り、その中央に1m四方の四角い井戸枠が設置されていました。井戸枠を取り上げたところ、長方形の板に文様が描かれていることが分かりました。上下に組まれた長方形板は合計16枚出土しましたが、上段の遺存状況が悪く、完全に残っていたのは下段の8枚だけでした。出土した楯は、その形態や特徴的な模様から、『延喜式』隼人司条に記載されている隼人の楯であることがわかりました。史料にみられる古代の道具が実際に発見されるのは非常に珍しい事例です。

出土した楯の特徴

楯はヒノキ材の一枚板を使用し、板目板が使われています。個体差がありますが、長さは約150cm、幅は約48cmです。表面は中央部を厚く、両側をやや薄くしています。中央には把手を固定するための孔を四ヶ所空けています。また楯の木目に沿って亀裂が入った部分を紐で綴じて補修するための小さい孔が複数空けられています。山形の頂部には小さい孔が一行に並んで空けられています。



『延喜式』第28巻 兵部省(隼人司条) (出典 国立公文書館デジタルアーカイブ)



隼人の楯を使った井戸の遺構 (提供 奈良文化財研究所)

京田辺市文化財指定制度 50 周年記念 (大住隼人舞文化財指定 50 周年記念)

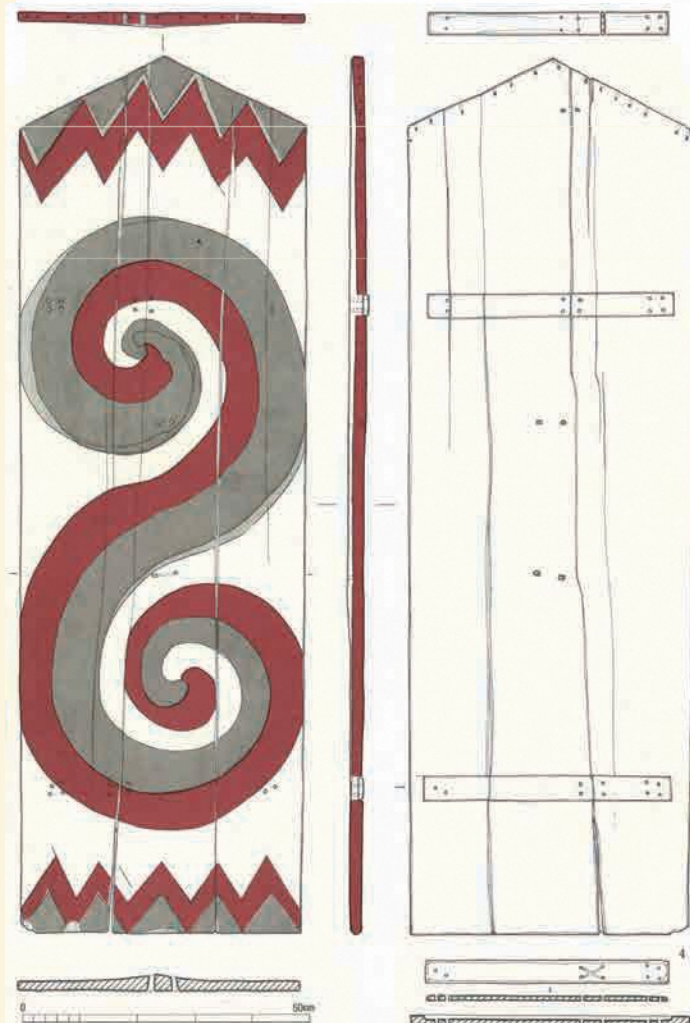
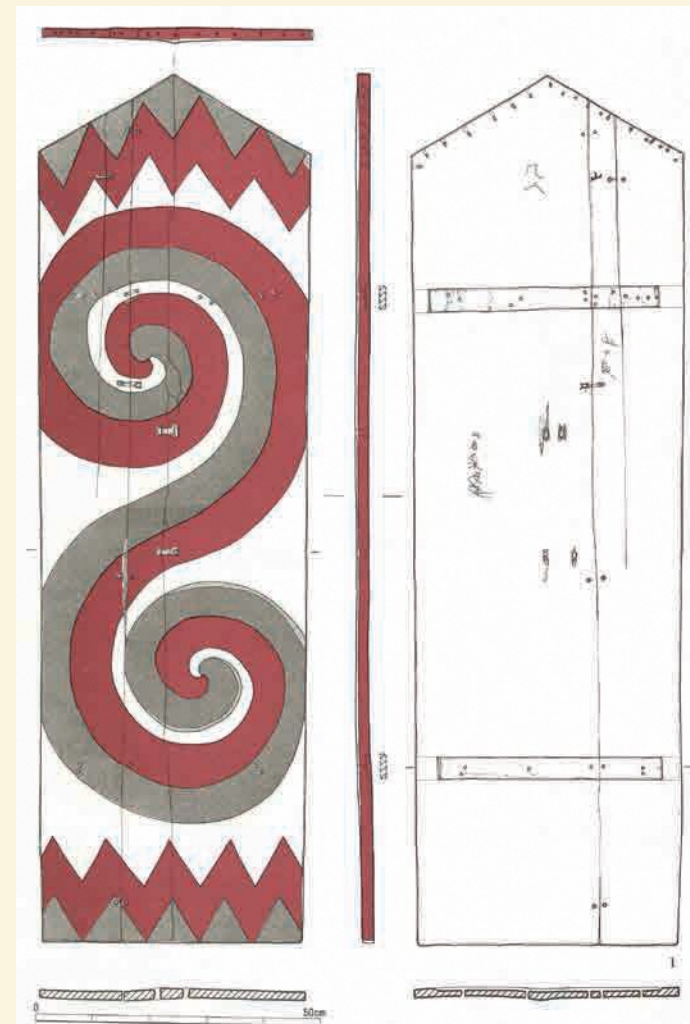
隼人の楯 特別展示・記念講演会

編集・発行 京田辺市市民部文化・スポーツ振興課

発行日 令和8年2月11日(水)

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80 TEL 0774-64-1300





楯 1

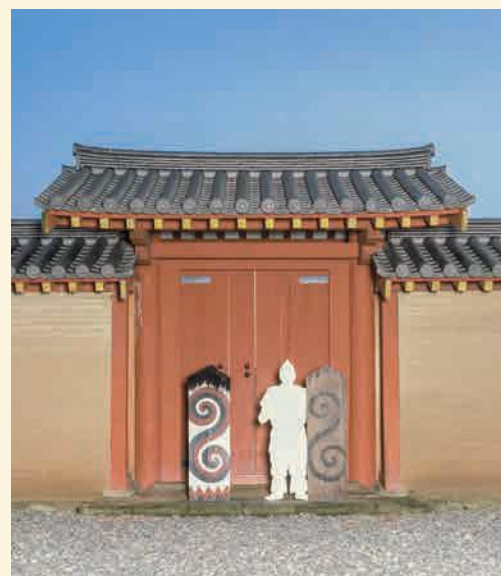
渦巻文の上半の彩色が、外側が赤く内側が黒い楯です。裏面には横棧をつける溝が設けられていますが、その溝を設定するための割り付け刻線がみられます。

また裏面には墨書で「山」、刻書で「口人」、「山マ長」「此者近水海口」などがみられます。



楯 1 の刻書

山
□
長



楯の使用イメージ

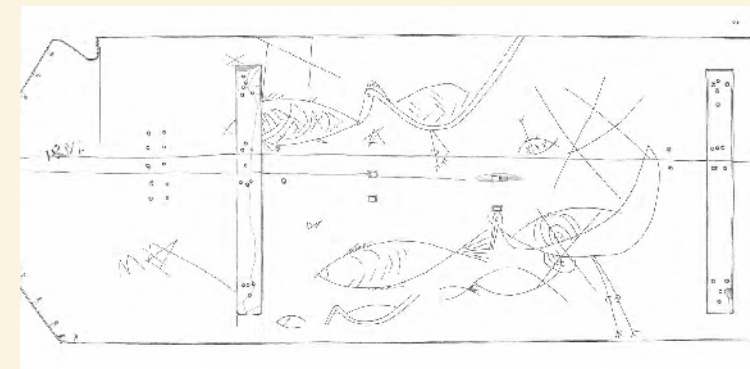
楯 4

渦巻文の上半の彩色が、外側が黒く内側が赤い楯です。表面の中央が少し厚く作られています。鋸歯文や渦巻文には割り付け線がみられます。裏面中央には楯の取っ手を取り付けたとみられる圧痕が残ります。楯の裏面に取り付けられた棧は、井戸枠の底に落下した状態で見つかっています。棧は四方を面取りし、角を丸く仕上げています。棧にみられる孔の間に紐を袈裟にかけた紐ずれの痕跡もみられます。



楯 2

頭部の傾斜が他の個体より強く、山形が高い楯です。裏面には頭部を左側に向けて2段に鳥や魚の刻線がみられます。鳥3羽と魚6匹が描かれ、右側から左側へ鳥が魚を追うような構図です。鳥は目を描き尾が高く、躍動感があります。脚が長く、水鳥とみられます。魚は鱗や鱗の有無に違いがみられます。



楯 2 の刻線

コラム 刻線はどこで描かれた？

多くの墨書や刻線が、楯を立てた時と同じ向きに書かれているのに対し、楯 2 の鳥や魚の刻線は楯を横に向けた状態で描かれています。仕事上の落書きとしては、楯を横に向ける必要があるため目立ってしまいそうです。延喜式によると、「楯は司(隼人司)に収めよ」と記述があるので、使用しない時も管理が行き届いていたようです。さて、この刻線は、いつどのように描かれたのでしょうか？



楯 5

表面の文様のうち鋸歯文には割り付けの刻線がみられ、渦巻文にも輪郭線がみられます。また裏面には「小墓」と書かれた刻書や、判読不明の墨書が残されています。

